戦前期立教大学野球部の活動と組織

谷ヶ城秀吉

はじめに

一九二〇年代から三〇年代にかけての東京と大阪は、高度経済成長期以上のスピードで人口が増加した時期であった。この人口急増に対応して東京・大阪の私鉄各線は、路線をさらに郊外へと延伸し、都市圏を拡大させた。ターミナル駅には百貨店が建設され、大衆を相手とした多様な商品が販売された。このような繁栄に基づいて大都市部では、大衆消費に基づくモダンかつ華やかな都市文化が育ち始めた。新聞や雑誌の発行部数が急増し、ラジオや映画といった新たなメディアも大衆に広く受容されていった。メディアの普及によって野球に代表されるスポーツもまた大衆娯楽へと成長していった[1]。

大阪朝日新聞社が主催する全国中等学校優勝野球大会（一九一五年開始、以下、全国中学野球大会）では、一九二四年に完成した甲子園球場において数々の熱戦が繰り広げられた。東京では一九二五年に正式発足した東京六大学野球連盟[2]が翌一九二六年に完成した神宮球場に多数の熱狂的な観客を集めてリーグ戦を展開した。いわゆる「野球狂時代」の到来である。

大衆娯楽としての野球が広まったのは、「帝国」の宗主国ばかりではない。一九二一年からは朝鮮・関東州代表が、一九二三年からは台湾代表が全国中学野球大会に出場し、好成績を収める植民地のチームも登場した。一九三一年の第一七回大会で決勝に駒を進めた台湾代表・嘉義農林のエース呉明捷は、その後早稲田大学（以

下、早大）に進学し、東京六大学野球でも投打において活躍した。在学中に呉は、当時のタイ記録である通算七号ホームランを放ったが、この記録は一九五七年に立教大学（以下、立大）の長嶋茂雄が通算八号ホームランを記録するまで破られなかった。全国中学野球大会や東京六大学野球は、「帝国」の縮図でもあった。

大衆娯楽と化した戦間期の学生野球を対象とした先行研究の問題関心を整理すれば、次の二つに大きく分類される。一つは、「野球道」に基づく精神主義や集団主義を日本の学生野球が持つ固有の性格として措定し、そこから近代日本の前近代性や未熟性ないし植民地近代性を読み取ろうとする試みである[4]。もう一つは、東京六大学野球の特色を学生主体の自治性に求めつつ、この統制を企図する国家権力（＝文部省）との対抗関係から「野球狂時代」における学生野球のありようを歴史的に位置づける潮流である[5]。とりわけ後者は、三つのプレイヤー（統制主体の文部省、被統制主体の野球部および両者を媒介する学生野球関係者）の行動から野球統制令（昭和七年文部省訓令第四号）が発せられる過程を論じつつ、大学野球部という組織の運営を可能とする経済的な側面にも踏み込んで議論を展開した点が興味深い。そこで本稿では、後者の視角に依拠しつつ、①大学野球部の活動を「帝国」大の拡がりから把握すること、②野球部組織を維持する諸誘因を明確にすること、の二つの作業を通じて一九二〇～三〇年代における大学野球部の活動を明らかにする。そして、「帝国」を構成する宗主国と植民地を結びつける文化的諸力としての大衆娯楽＝野球が普及する過程を問題提起的に切り取ることを課題とする[6]。

1　一九二三～二四年における立教大学野球部の台湾遠征

よく知られているように、草創期の大学野球部は海外遠征を積み重ねることによって野球技術の水準を向上させた。早大の北米遠征（一九〇五年）、慶應義塾大学（以下、慶大）のハワイ遠征（一九〇八年）を皮切りに両校は、連盟が結成される一九二五年までの間にそれぞれ数回の海外遠征を経験している。とりわけ一九一〇年代には、フィリピンおよび朝鮮・満洲へ頻繁に遠征する各校の姿が『六大学野球全集』の記録から垣間見ることができる。一九一七年一二月にはじめて行われた早大の台湾遠征（表1）もまた、フィリピン遠征の途上にあった同校が台湾に立ち寄ることで実現したものであった[7]。

この早大遠征を端緒として一九一七年から一九三七年

表１　東京六大学野球連盟チームの台湾遠征一覧

期　　間	大学名	順位 春	順位 秋	主　　催	試合数
1）1917.12.17－1918.1	早稲田大学	―	2	北部野球協会	9
2）1918.12.28－1919.1	法政大学	4	3	北部野球協会/嘉義野球協会	9
3）1922.12.25－1923.1.9	慶應義塾大学*	1	2	神代正雄	10
4）1922.12.30－1923.1.9	法政大学	3	5	伊藤杏堂（台南新報記者）ほか	9
5）1923.12.28－1924.1	立教大学**	4	4	台湾体育協会/台北倶楽部	10
6）1929.12.27－1930.1.9	慶應義塾大学	1	2	台湾日日新報	9
7）1930.12.30－1931.1.12	早稲田大学	3	3	〃	8
8）1931.12.29－1932.1.15	明治大学	5	3	〃	12
9）1932.12.29－1933.1.13	法政大学	2	1	〃	11
10）1933.12.29－1934.1.25	立教大学	1		〃	9
11）1934.12.29－1935.1.18	早稲田大学	3		〃	10
12）1935.12.28－1936.1.15	立教大学	4	2	〃	11
13）1936.12.26－1937.1.13	明治大学	1	2	〃	11

（出所）謝仕淵「帝国的体育運動与殖民地的現代性――日治時期台湾棒球運動研究」（国立台湾師範大学歴史学系博士論文、2011年1月）118頁より作成。
（備考）1）*慶應義塾大学は、大学と普通部の混成チーム。
2）**「帝国的体育運動与殖民地的現代性」では９試合と掲げられているが、実際は10試合。

の二〇年間に東京帝国大学（以下、東大）を除く五チームが延べ一三回の台湾遠征を敢行した。この一三回の遠征は、前述の早大遠征を含む一九二四年までの五回と一九二九年以降の八回に区分しうる。その最大の差異は、前者が多様な人々によって主催されたのに対し、後者は一貫して台湾日日新報社が主催者を務めたことにある。この経緯について本稿では、立大野球部の活動を事例に立ち入って見ていきたい。

立大野球部が帝国日本の植民地であった台湾にはじめて遠征したのは、一九二三年一二月から翌年一月にかけての約二週間であった。その前年の一九二二年七月から八月にかけて立大野球部は、初めての海外遠征（朝鮮・満洲）を経験している[8]。したがって、この台湾遠征は立大にとって二度目の海外遠征に当たる。遠征の目的は明らかではないが、手がかりは残されている。主将の太田清一郎捕手と橋本哲夫遊撃手は、『台湾日日新報』のインタビューに対して次のように応えている。

矢張りチームの歴史と云ふものは試合になつて意外に力あるものです…（略）…昨年春から大学リーグ戦に加盟しましたので今暫く奮闘せねばなりますまい[9]

彼らが問題視していたのは、一九二一年にリーグへ加盟したばかりの立大は「歴史」＝経験が浅く、それゆえゲームにおいて力を発揮できないことであった。事実、新たにリーグへ加わった法政大学（一九一七年加盟。以下、法大）と立大は、一九二五年に東京六大学リーグが成立するまで常に最下位争いを演じていた。以上の状況から判断すれば、一九二二年以降に実施された植民地遠征の主目的は、シーズンオフを利用したゲーム経験の蓄積にあったものと考えられる。

一九二三年一二月二八日に笠戸丸で基隆に到着した立大野球部一五名は、二九日台北倶楽部（鉄団、総督府団、台北州団、中学校学生団の混成チーム）、三〇日嫩倶楽部（旧嫩倶楽部、専売養気団、陸軍団、鈴木済美団の混成チーム）と相次いで対戦した[10]。会場となった台北の円山球場は「著く汽動車毎に満員鈴なりの有様で試合開始頃にはスタンドは殆んど黒くなつた」という人気であった[11]。三一日には新竹に移動して全新竹倶楽部・台北倶楽部とダブルヘッダーを戦い、一月一日と三日には高雄で嫩倶楽部と再戦した。台北と同様に高雄でも「千余枚の会員券売切れと云ふ人気」であった[12]。四日午後二時には台南で塩水港製糖と対戦し、夜行列車で台北に戻ったあと、翌五日午後二時から台北倶楽部と戦った。さらに六日と八日にも嫩倶楽部・全台北とそれぞれ対戦した。戦績は、一〇戦八勝一敗一分であった。ゲーム経験の蓄積に遠征の目的を求めるならば、立大野球部にとってこの遠征は相当に充実したものとなったはずである。

ところが、台湾に遠征した立大野球部は「不愉快な印象を残し帰国」することになった[13]。直接の原因は、一月一日に高雄グラウンドで開催された対嫩倶楽部戦の審判判定に対する不服にあるが[14]、さらに重要な問題は次のインタビューに示されている。

> 私達は普通学生団の遠征と同じ意味で来たのに拘はらず主催者側の無理解から純然たる興行チームとして取扱はれたやうに思はれます要するに主催者側の甘言に乗せられ悪辣なる彼等の為めに利用された様なもので一般の収益は徒らに彼等一味の懐を肥やしたに過ぎません…（略）…滞在十二日間十回の試合も多過ぎたでせう[15]

つまり、立大野球部の不満は、①遠征試合の興業化と収益の独占、②収入の積み上げを目的とした過密スケジュール設定、という主催者の行動に集約される。

表1に前掲したように、立大野球部を台湾に招聘したのは台湾体育協会と台北倶楽部であった。台湾体育協会

は、一九一五年に設立された北部野球協会を前身とする。[16] 北部野球協会は、高橋辰次郎（臨時台湾総督府工事部長）を会長、加福豊次（台北庁長）を副会長とする、官製の色彩が強い野球団体であった。同協会の主たる目的の一つは、日本国内の強豪チームを台湾に招聘し、交流試合を通じて台湾島内チームの技量を向上させることにあった。[17] 前述した早大の台湾遠征もまた高橋会長が「上京の砌り早稲田大学の運動部長安部磯雄氏と会見して色々と打合」せたことで実現したものであった。[18] 一九二二年一一月、「宜しく序上の団体〔北部野球協会、漕艇協会、北部庭球協会などのスポーツ団体〕を統一して別に基礎強固なる団体を組織し相協力して斯界の発達を企図」した下村宏総務長官の主導によって台湾体育協会が財団法人として設立された。北部野球協会は台湾体育協会の野球部に改組された。一九二二年度の台湾体育協会野球部予算一一二四円のうち、約四〇％に相当する四六六円が島外チーム招待関係費に充てられた。島外チームの招聘事業は、同協会野球部においても引き続き中核事業とみなされていたようである。

いま一方の主催者である台北倶楽部は、立大の招聘に当たって臨時に結成された組織であった。[19] ただし、『台湾日日新報』には「主催者の神代芹沢」[20]と記されていることから、実際の運営は台北で三K商店という運動具店を経営する傍ら一九二二～二三年の慶大遠征を主催した経験を持つ「野球ブローカー」神代正雄と高雄で機械・金物店を営んでいた「台湾球界の名物男」芹沢健治の二名によって担われていた。台湾体育協会は、名目上の主催者にすぎないと考えて差し支えないだろう。

ところで神代と芹沢は、立大と同時に甲陽中学（同年の全国中学野球大会優勝）を台湾に招聘していたが、ここでも立大と同様の問題を引き起こしていた。

> 去る〔一九二四年一月〕三日台北円山運動場で挙行された内地から遠征来の兵庫県立甲陽中学チームと新たに組織された台北倶楽部A組との野球試合は台湾野球界史を汚涜するものである、今回の催しは一種の興行的の企であるが主催者某々は金子儲けの為に■■放題の真似をなし、台湾体育協会の鼻先と台北市役所の無理解を■として居る（■は汚損のため判読不能の文字を示す）[21]

要するに事実上の主催者である神代と芹沢の目的は、公的性格の強い台湾体育協会を名目上の主催者としつつ、台湾において高まりつつあった野球人気を背景として本質的に非営利性が期待される学生野球をビジネス化し、利益を得ることにあった。とりわけ「堂々たる選手から

成る店員を率ゐ、店のことは其方のけにして野球に熱狂ばかりしてゐ」たことから「何万といふ財産も棒に振」った芹沢にとって立大と甲陽中学の遠征は[22]、それまでの損失を補填しうる絶好の機会であった。

では、立大側の目的は、ゲーム経験の蓄積だけにあったのだろうか。ここで注意したいのは、彼らが言う「普通学生団の遠征」は、必ずしもチームに対する無報酬を意味するわけではないことである。やや後の時期となる一九二八年度の立大野球部収支を表2に掲げた。同年度における他大学の収入がそれぞれ慶大三八四一六円、早大七〇一六八円、明大七六八三六円であったのに対し[23]、立大のそれは二八一六五円にすぎない。おそらくその要因は、リーグ戦観客動員数の差異によって生じたものと思われるが、それゆえ立大にとって地方遠征入場料は損益を決定する重要な収入源であった。しかも、当時の野球部の財政はきわめて厳しい状況にあり、用具代の未払いさえ生じていた[24]。以上の状況を鑑みれば、立大野球部の不満は、彼らが満足する収入の分配が得られなかったことにあったと考えるのが自然であろう。

表2　立教大学野球部収支（1928年度）

（単位：円）

収入		支出	
リーグ戦入場料	20,115	用具費	4,417
部費	1,700	部員合宿家賃	3,912
地方遠征入場料	6,350	運動場設備整理費	1,649
		その他	18,574
計	28,165	計	28,552
差引			▲387
合宿建築費			5,000
再差引			▲5,387

（出所）立教大学野球部編纂委員会編『立教大学野球部史』（セントポールズ・ベースボール・クラブ、1981年）60頁より作成。

このトラブルについて『台湾日日新報』は、「将来台湾に他のチームを招聘する場合或は優秀な野球選手を台湾の野球界に迎へる上に大きな支障を作つた事を台湾運動界の為遺憾に思ふ」[25]と報じている。そして、『台湾日日新報』の予見が的中したかのように、その後しばらくは東京六大学野球リーグに属するチームの台湾遠征が行われなくなったのである。

2　一九三三～三六年における立教大学野球部の台湾遠征

立大のトラブル以降、東京六大学野球リーグに属するチームの台湾遠征は一九二九年の慶大遠征まで行われていない。とはいえ、一九二四年の立大遠征から一九二九年の慶大遠征までの五年間に日本国内チームの台湾遠征がまったく行われなかったわけではない。

一九二四年三月には、台湾体育協会の主催によって大毎が二度目の台湾遠征を行い、一〇戦一〇勝の好成績を残している。その後、同志社大学（同年一二月、プロ団主催、三勝一敗）、長崎高商（一九二五年一二月、塩水港製糖野球部主催、七勝二敗）、山口高商（一九二七年一二月、黒洋倶楽部主催、五勝二敗一分）、立命館大学（同、三勝二敗）、京都帝国大学（以下、京大、一九二八年一二月、台湾日日新報社主催、五勝四敗）といった具合に西日本の学生チームがほぼ毎年台湾に遠征している。

これらの遠征から看取されることは、次の二点である。一点目は、遠征した学生チームには何らかの形で「報酬」が支払われたことである。たとえば立命館大学の遠征では、剰余金五〇〇円のうち経費を控除した四〇〇円が立命館大学の選手に贈呈された[26]。また、京大の遠征に際して台湾日日新報社は、選手の招聘旅費や滞在雑費はもちろん、見学費や餞別まで負担した（表3）。前掲表2でも確認したように、たとえ学生であるとはいえ、遠征チームに対する現金の付与は異例ではなかった。

表3　京都帝国大学台湾遠征における収支（1928〜29年）

（単位：円）

収入（A）	3,385.95
支出（B）	3,240.75
選手招聘旅費及雑費（15人分）	1,661.20
選手見学費寄附	300.00
一行へ餞別	100.00
試合費	885.00
雑費	294.55
A−B	145.20
台北市役所に寄附	▲300.00
台湾日日新報社損失	▲154.80

（出所）湯川充雄編『台湾野球史』（台湾日日新報社運動具部、1932年）612頁より作成。

それゆえ、遠征チームへの「報酬」付与を前提とすれば、主催者側の支出は自ずと増大せざるをえない。それを賄うためには、観衆から一定の入場料を徴収しなくてはならない。ところが、台湾では入場料の徴収が必ずしも一般的ではなかった。前掲した長崎高商との交流試合では観衆から入場料を徴収したがゆえに観客動員数が伸び悩み、「頗る淋しく定連は五百人許り」にすぎなかったという[27]。その要因を湯川充雄は、①「運動競技を有料で見る事に習されて居ない事」、②「有料で見る程の緊張した、興味あるゲームのない事」の二つに求めている。要するに一九二五年から一九二九年にかけての招聘事業が抱えた問題は、入場料に見合った水準のゲームを観衆に提供できないことにあった。台湾側チームの技量水準をただちに引き上げることが困難であるならば、高い技量を持つチームを台湾に招聘することが最も現実的な解決策となるであろう。当時、最も高い水準の技量を有するチームは、東京六大学野球リーグに属する大学野球部であった。

二点目は、台湾総督府の支援を受けた御用新聞の台湾日日新報社が主催者として登場したことである。前述の山口高商を招聘したのは、黒洋倶楽部という実業野球チームであったが、台湾日日新報社は台湾体育協会とともにこの招聘を後援した。翌年、台湾日日新報社は単独で京大の台湾遠征を主催した。一九二九～三〇年の慶大遠征は（表1）、山口高商と京大を招聘した経験を踏まえたうえでなされたものであると考えられる。日本国内の学生野球イベントと同様、植民地台湾においてもメディアがスポーツイベントを介して野球普及者の役割を果たすことになった。一九二九年以降に台湾日日新報社が主催した東京六大学野球リーグ所属チームの台湾遠征は、この二つの背景を前提として理解する必要がある。

イベントに関わる経費や遠征チームに対する「報酬」を賄うためには、観客動員数を増大させ、一定の収入を得る必要がある。そのために台湾日日新報社は、遠征チームに関する情報の提供に紙面の多くを割いて積極的なプロモーションを展開した。その変遷について確認しておこう。

前述した一九二三～二四年における立大の台湾遠征に関する第一報は、一九二三年一二月一三日の紙面に掲載された。その後、立大の基隆到着を報じた二九日までに立大の台湾遠征に関する記事が掲載されたのは、一六日（「立教大学と台南の野球」）、一九日（「新竹野球協会で立教チーム招聘」）、二八日（「立教大学対台北倶楽部野球戦」）の三回にすぎない。いずれも試合の日程を知らせるほんの数行の小さな記事であった。一九二五～二六年における長崎高商の遠征もほぼ同様の扱いであった。長崎高商の台湾遠征を報じる第一報は、一九二五年一一月三〇日の夕刊（「長崎高商野球団来台」）であったが、一二月二五日の同校の到着までに同校に関する記事が紙面に掲載されたのは三回にとどまった。

ところが、台湾日日新報社が後援した山口高商の遠征では様相が異なる。『台湾日日新報』が山口高商の台湾遠征をはじめて報じたのは一九二七年一二月四日の夕刊（「山口高商野球団／本月下旬来台に内定」）であった。その後、二七日に同校が台湾に到着するまでに掲載された記事はそれ以前と同様に三回にとどまったが、そのうち一回（「近く来台する山口高商の陣容」一九二七年一二月一三日）は山口高商のチームとしての特色を詳細に紹介するものであった。一九二九～三〇年に台湾日日新報社が主催した慶大の台湾遠征は、一九二九年一一月二二日「慶應大学野球部第一選手来征」によってはじめて報じられたが、一二月二七日に慶大が到着するまでに数回にわたって関連記事が同紙に掲載された。その内容は、単なるスケジュールの告知だけではなく、選手の経

歴を詳細に紹介するものであった（「ファンの憧れ／慶應軍の顔触／いずれも世界的名選手揃ひ」一九二九年一二月八日）。一九三三～三四年に一〇年ぶりの台湾遠征を敢行した立大の場合も同様であった（表４）。一九三三年一〇月一五日の紙面において立大野球部の台湾遠征を報じると[28]、立大野球部が台湾に到着する一二月三〇日までに『台湾日日新報』は、相当の紙面を割いて特集を組み（「立教RIKKIOを謳ふ」五回、「立教を迎へる強豪」二回）、立大野球部と対戦相手である在台湾野球チームを紹介している。『台湾日日新報』は、招聘するチームのメディア露出を事前に高めることで観客動員数の増大を企図したものと思われる。

表４　1930年代における立大野球部台湾遠征の戦績

日 程	スコア	対戦相手	球 場
1934. 1. 1	○ 4－0	CB団	台北/円山球場
1934. 1. 2	● 8－14	鉄団	〃
1934. 1. 3	○ 3－1	CB団	〃
1934. 1. 5	○15－0	全台中	台中/水源地球場
1934. 1. 6	○ 7－3	全台南	台南/台南市営球場
1934. 1. 7	● 2－4	全高雄	高雄/東球場
1934. 1. 9	○13－4	嘉義クラブ	嘉義/嘉義市営球場
1934. 1.13	○ 5－1	鉄団	台北/円山球場
1936. 1. 1	○10－1	鉄団	台北/円山球場
1936. 1. 2	○ 4－2	CB団	〃
1936. 1. 3	○ 9－4	専売団	〃
1936. 1. 4	○ 5－4	鉄団	〃
1936. 1. 5	○14－3	台南州団	台南/台南市営球場
1936. 1. 7	○12－1	全高雄	高雄/高雄市東球場
1936. 1. 8	○ 4－3	全嘉義	嘉義/嘉義市公園球場
1936. 1.10	○19－1	台中CP団	台中/水源地球場
1936. 1.11	○ 5－0	CB団	台北/円山球場
1936. 1.12	○13－8	専売団	〃
1936. 1.13	○ 7－3	台北高商	〃

（出所）『台湾日日新報』各号、久保田正次編『立教大学野球部史（昭和十年度）』（立教大学野球部、1936年）46～54頁より作成。

招聘チームの意欲を高めるために台湾日日新報社は、植民地行政が有する「権威」をも積極的に活用した。一九二三～二四年の遠征と一九三三～三四年のそれを比較してみよう。

一九二三年一二月二八日午前五時に笠戸丸で基隆に到着した立大野球部は、午前七時三〇分の列車で台北に向かった[29]。台北駅では招聘関係者が「運動家らしい簡単な而も熱のある挨拶」で出迎えた。その後、「一行は停車場前で出迎への人々と別れ直ちに宿舎の二葉旅館に引揚げ」、二八日午後練習、二九日午後台北倶楽部、三〇日嫩倶楽部と対戦、というように、淡々と日程を消化している。一方、一〇年後の一九三三年一二月三〇日午後五時に基隆港に到着した立大野球部一行は、同港で台湾日日新報社社員の出迎えを受けたあと、自動車に分乗して台北に向かった[30]。同日午後七時には、蓬莱閣において歓迎会が開催された。歓迎会の出席者は、在台日本人商工業者の重鎮である三好徳三郎や台湾体育協会の関係

者、台湾日日新報社の河村徹社長および対戦相手の鉄団（台湾総督府鉄道部）・CB団（同通信局）の選手全員であった。翌三一日には再び自動車に分乗して台湾神社を参拝しつつ、中川健蔵台湾総督と平塚広義総務長官をそれぞれ官邸に表敬訪問した[31]。一九三四年一月一日に開催されたCB団戦は、中川総督と平塚長官が観戦した[32]。立大野球部が戦ったのは、一九二三～二四年の一〇試合とほぼ同じ九試合であった。しかし、百瀬和夫捕手によれば、「愉快な台湾遠征であつた」[33]。

そのわずか二年後、立大野球部は三回目の台湾遠征を敢行する。一九三五年一二月一二日の『台湾日日新報』紙面で立大遠征が報じられると、前回同様に特集が組まれ（「立教再び来征」七回、「立教軍を迎へる」六回）、立大野球部の選手が紹介された。目玉は、一九三五年秋リーグでホームラン王となった景浦将投手と西郷隆盛の孫の西郷準投手であった[34]。一二月二八日午後に基隆に到着した立大野球部一行は、立大校旗と台湾日日新報の社旗を掲げた汽車に搭乗して台北に入り、河村社長の出迎えを受けた[35]。その後、台北駅前に準備された自動車七台に分乗して台湾神社を参拝し、次いで前回同様に総督官邸と総務長官官邸を訪問して中川総督と平塚長官を表敬訪問した。一月九日には日月潭に立ち寄って発電所を見学するとともに、台北では板橋の林本源庭園や北投温泉の台湾日日新報社クラブを訪問した[36]。立大は、一一戦全勝で三回目の台湾遠征を終えた。

3　台湾遠征の誘因

一九三〇年代において立大野球部が海外遠征を実施した意図を探ることは容易ではない。まず、一九二〇年代のように、シーズンオフを利用したゲーム経験の蓄積に主たる目的が置かれたのではないことは確かであろう。生活環境が大きく変化する海外遠征は、選手にとって身体的負担が大きい。たとえば朝鮮・満洲遠征では、「一同が代る代る腹をこはして居るので試合の上に大影響を及ぼし」（一九二二年）[37]、「原〔友次一塁手〕が腸チフスで入院したり、野田〔健吉〕、片田〔宣道〕両投手が風邪や腹痛に見舞われたりで苦労の多い旅となった」（一九二五年）[38]。また、「非常な暑さのため安東では病人が続出した」[39]（一九三四年）。しかし、そうしたリスクの割に得られるゲーム経験は、決して大きくなかったと考えられる。なぜなら、最高水準のリーグに属する立大野球部と在植民地チームの力量が、あまりにも乖離していたためである（表4）。したがって、遠征の主目的は別の要因に求めるべきであろう。

植民地台湾において制度化された台湾日日新報社によ

るイベント招聘に応じて立大野球部が消極的に受け入れた結果と考えることも可能である。しかし、この仮説は次の記事によって棄却される。一九三五年三月、立大野球部の浦田健二主将が東京に出張した鉄団の選手に対して「来る春のシーズンオフの六月頃是非台湾に遠征したいから何とか骨を折つてもらひたい旨を漏らした」と『台湾日日新報』が報じている[40]。この遠征案は、「浦田、古岩井〔理一郎〕両選手のゐる所から久保田〔正次〕部長が言ひ出したもので、両君としては其意はあるが何しろリーグ戦後の短時日しかなく不可能」となったが[41]、ここからは立大野球部が積極的に台湾遠征を志向する姿が垣間見えよう。

きわめて短い期間に立大野球部が台湾遠征を繰り返した要因について本稿は、野球部組織のあり方から説明を試みたい。一九三一年秋季リーグで立大野球部は初優勝を遂げたが、この優勝は新たな問題を生じさせた。当時、東京六大学野球リーグの優勝校は、アメリカに遠征することが慣行となっていた[42]。以下、やや長くなるが当時のマネージャーであった藤田寛治の回顧を掲げておこう。

> 扨私共が初めて優勝して見るとやはり米国遠征をやり度いと云う気持の出て来るのも当然の事であります。まして立教は聖公会との関係もあり、それは一つ計画して見様かと云う事になり、色々と研究を初めたのでありますが…（略）…経費の問題になると全然予算が立たない。それで、無謀とも思われるので仕方無く久保田先生と相談して中止する事にしたのであるが、さあそうなると選手は承知しない。山城〔健三主将〕君が中心となって米国遠征をやらないのならば我々は退部すると云う様な空気になって来た。忘れもしない旧智徳寮の玄関側の一隅に集合して私しはつるし上げに会った。仕方なく部長先生と相談して遠征を決行する事にした[43]。

一九三〇年一一月に立大では主力選手による野田健吉監督の排斥運動が発生しており、「山木〔貞夫〕主将を始めとし縄岡〔修三〕投手、大内〔又三郎〕二塁手など二十余名の選手が袖を連ねて脱退したため…（略）…野球部は事実上壊滅の形となつた」[44]。最終的には富田彬部長と野田監督が辞任し、久保田正次が部長に就任することで事態が収拾されるが、久保田が憂慮したのはこうした事態の再現であった[45]。結局、選手の意向を優先して一九三二年にアメリカ遠征が強行された。

しかし、遠征費用を捻出するために立大野球部は「出入りの運動具屋さんからまで借金」することになった。

そのため、「借金が昭和十八〔一九四三〕年くらいまで続いた」[46]。一九三三年に立大予科に入学した田宮富士雄は、「昭和七〔一九三二〕年のアメリカ遠征以来、部の財政は赤字であったと聞いておりますが、全く赤字で非常に苦しんでおりいつ破算するかと悩んで」いた[47]。アメリカ遠征の強行は、立大野球部の財政状態を破算直前にまで追い込んだのである。

野球部の主たる財源はリーグ戦の入場料であったが、一九三〇年代初頭には学生野球の「商業化」、「興業化」が問題視されており、これを是正する学生スポーツ浄化運動が展開されていた[48]。しかも表5に見るように、リーグ戦入場料の配分金は平等ではなかった。立大への配分率は、東大を除く五つの私立大学の中で最も低位にあった。これは、他のチームに比して立大野球部の財政が最も脆弱であったことを意味する。立大野球部が借入金を返済するためには、支出の削減や低利資金への借換[49]などのほかに追加的な収入を得る必要があった。以上の状況を鑑みれば、一九三三年以降における立大の積極的な海外遠征は、文部省の統制が及ばない植民地で興行を行うことにより追加的な収入を得ることにあったと考えるべきであろう[50]。

表5　東京六大学野球連盟収支

（単位：円）

	1932年秋	1933年春(A)	1933年秋(B)	1933年度(A+B)	1935年度
収　入					
内野券	116,412	53,744	83,040	136,784	…
外野券	133,190	59,488	21,288	80,776	…
学生券	30,018	12,874	105,410	118,284	…
その他	20,000	―	―	―	…
計	299,620	126,106	209,738	335,844	478,847
支　出					
リーグ積立金	13,787	12,611	20,974	33,584	…
別途積立金	46,699	6,305	―	6,305	…
球場使用料	23,969	12,611	21,024	33,634	…
雑費	15,801	6,864	11,034	17,898	…
計	100,256	38,390	53,032	91,422	104,748
差引	199,364	87,715	156,707	244,422	374,099
各校配分金**					
早稲田大学	48,064（24.1）	24,127（27.5）	33,601（21.4）	57,729（23.6）	60,000（16.0）
慶應義塾大学	42,742（21.4）	18,754（21.4）	32,469（20.7）	51,223（21.0）	58,940（15.8）
明治大学	32,261（16.2）	13,243（15.1）	25,530（16.3）	38,773（15.9）	47,710（12.8）
法政大学	43,697（21.9）	14,357（16.4）	19,364（12.4）	33,721（13.8）	54,710（14.6）
立教大学	19,762（9.9）	12,051（13.7）	23,131（14.8）	35,182（14.4）	49,754（13.3）
東京帝国大学	12,837（6.4）	5,183（5.9）	22,611（14.4）	27,794（11.4）	43,491（11.6）

（出所）「秋のリーグ戦／収入卅万円」（『東京朝日新聞（朝刊）』1932年12月8日）、「総収入十二万六千円也」（同1933年6月7日）、「秋のリーグ戦収入廿万円」（同1933年12月25日）、「リーグ戦の会計報告」（『読売新聞（朝刊）』1936年1月28日）より作成。

（出所）1. *雑費の内訳は、整理員費、切符費、警官弁当代。
2. **各校配分金の右側括弧内の数値は、配分金総額に占める各校の割合（%）を示す。
3. ―はゼロ、…は不明を示す。

おわりに

以上、一九二〇年代から三〇年代にかけて繰り返し行われた大学野球部の植民地遠征を立大野球部の台湾遠征を事例として観察してきた。本稿が得た知見は、次の通りである。

一九二〇年代において立大野球部が植民地遠征を行った目的は、①シーズンオフを利用したゲーム経験の蓄積、②野球部組織を維持するために不可欠な収入の確保、の二つにあった。わけても他大学に比してリーグ戦収入が少なく、地方遠征入場料に依存する財政構造にあった立大野球部にとってその多寡は、組織の死活に直結する問題であった。しかし、満足しうる収入の分配を得られるか否かは、主催者の行動に規定されていた。一九二三～二四年の台湾遠征の場合、主催者自身が利益の確保を強く意図したため、立大野球部は十分な収入の分配が得られなかったものと思われる。以後、東京六大学野球リーグに属するチームの台湾遠征はしばらく中断することになった。

一九三〇年代に大学野球部の台湾遠征を主催した台湾日日新報社は、イベントに関わる経費や遠征チームに対する「報酬」を賄うために観客動員数を増大させ、収入の増加を試みる行動を採った。そのため、同社は『台湾日日新報』の紙面を活用して積極的なプロモーションを展開し、植民地台湾における野球普及者の役割を担った。ただし、立大野球部は植民地台湾において制度化された台湾日日新報社によるイベント招聘に応じて消極的に台湾遠征に参加したわけではない。むしろ、立大野球部は積極的でさえあった。その背景として本稿では、①主力選手による一九三〇年の野田監督排斥事件に起因する部組織の動揺、②部組織の維持を主眼としたアメリカ遠征の強行、③アメリカ遠征費用を捻出するための多額の借入金と部財政の逼迫、④借入金の返済を目的とした追加的収入の確保、という一連の経緯が立大野球部を台湾遠征へと駆り立てた要因であるとした。

「野球狂時代」における大学野球部の組織は、「合宿に於ける食費」や「運動具店（玉沢）より私物の購入」[51]という経済的誘因と優勝の対価として付与される「栄誉」としてのアメリカ遠征という社会的誘因によって維持されていた。だが、いずれもが多額の支出を要した。一九三〇年代において東京六大学野球リーグは、その「商業性」や「興業性」が強く批判され、リーグ戦収入の増大は望めない状況にあった。そこで大学野球部は、文部省の統制が及ばない植民地への遠征を積極的に行い、追加的な収入の確保を試みた。そうした行動が結果として「帝国」を構成する宗主国と植民地を結びつける

文化的諸力として発揮されたのである。

注

(1) 以下、有山輝雄『甲子園野球と日本人――メディアのつくったイベント』（吉川弘文館、一九九七年）一一八～一二八頁、中村哲也『学生野球憲章とはなにか――自治から見る日本野球史』（青弓社、二〇一〇年）一一～二〇頁。

(2) 一九〇三年の早慶戦に端を発する東京六大学野球連盟のリーグ戦は、紆余曲折を経て一九二五年に正式発足した。その後、早稲田大学のリーグ脱退・再加盟によって同連盟は東京大学野球連盟と改称する。本稿では煩雑を避けるために、一般名詞としては「東京六大学野球」、組織としては「連盟」と表記する。

(3) 「殊に「六大学野球連盟戦」は、今や啻に日本球界の最大権威たるのみでなく、米国大リーグの世界争覇戦と共に、世界野球界の二大権威となつてしまつた。そして日本の野球熱は世界に冠絶し、無慮三百万の熱狂的好球家を擁してゐるといはれている」（庄野義信編『六大学野球全集』上巻、改造社、一九三一年、一頁）。

(4) たとえば、前掲『甲子園野球と日本人』、清水諭『甲子園野球のアルケオロジー――スポーツの「物語」・メディア・身体文化』（新評論、一九九八年）、謝仕淵「帝国的体育運動與殖民地的現代性――日治時期台湾棒球運動研究」（国立台湾師範大学歴史学系博士論文、二〇一一年一月）など。

(5) 中村哲也「「野球統制令」と学生野球の自治―一九三〇年代における東京六大学野球を中心に―」（『スポーツ史研究』第二〇号、二〇〇七年三月）。

(6) 「帝国」の概念については、山本有造「「帝国」とはなにか」（山本有造編『帝国の研究――原理・類型・関係』名古屋大学出版会、二〇〇三年）、谷ヶ城秀吉『帝国日本の流通ネットワーク――流通機構の変容と市場の形成』（日本経済評論社、二〇一二年）を参照されたい。

(7) 「大正六（一九一七）年十二月二十四日神戸を出帆し、南征の途に上つた早大野球部は、台湾を経て麻尼拉に渡航、同地の謝肉祭野球競技に優勝し極東選手権を獲得し…（略）…二月二十二日無事凱旋した」（前掲『六大学野球全集』上巻、一六五頁）。

(8) 立教大学野球部編纂委員会編『立教大学野球部史』（セントポールズ・ベースボール・クラブ、一九八一年）一七～一八頁。

(9) 「制服制帽でバットをぶら下げ／立教大学の選手連／晴れやかな顔をしてやつて来た」（『台湾日日新報』一九二三年一二月二九日）。

(10) 以下、湯川充雄『台湾野球史』（台湾日日新報社運動具部、一九三二年）五七一～五七八頁。同書の記録では、一月三日の対嫩倶楽部が欠落しているため、『台湾日日新報』の記事で補った。

(11) 「立教軍十対二で捷つ」（『台湾日日新報』一九二三年一二月三〇日）。

(12) 前掲『台湾野球史』五七三頁。

(13) 「職業チームか学生チームか／誤解された立教選手」（『台湾日日新報』一九二四年一月一二日）。

(14) 「第三回嫩に好機到来し先づ有村の決打にて二点を占め続く太田又安打して一挙七点を得たが、此時審判に就て悶著を起し立教憤慨して退場せんとして徒に時間を空費したが仲裁者が立教側を慰撫し塁審を代へて試合を続行する事となり…（略）…第九回に嫩一点を得て立教無為結局十対八のスコアで嫩の勝利に帰した」（「立教敗る」『台湾日日新報』一九二四年一月三日）、「高雄に於ける立教対嫩倶楽部の第二

回野球試合は二日午後二時から挙行の予定であつたが前日の審判問題が原因して立教側では選手が疲れてゐるから今日の試合は三日に延期して呉れと申出たので…（略）…遂に主催者側から右の経過を一般観衆に告ぐると同時に三日午後二時から試合を決行する旨を通じたので観衆は失望し不平タラタラで退散した」（「幾千の観客に／不平と不満を与へた／高雄野球試合の悶着」『台湾日日新報』一九二四年一月四日）。

(15) 前掲「職業チームか学生チームか／誤解された立教選手」。

(16) 以下、前掲『台湾野球史』一一～一九頁。

(17) 「北部野球協会が大正四（一九一五）年創立されて以来、其の事業の一つとして帝都の大学学生強チームを台湾に招聘したいと云ふ計画は随分久しいものであつた」（同前、五四〇頁。）

(18) 同前。

(19) 以下、同前、五六九～五七〇頁、六九二頁、七五二頁。

(20) 前掲「職業チームか学生チームか／誤解された立教選手」。

(21) 「醜劣を極めた／甲陽台北野球戦」（『台湾日日新報』一九二四年一月五日）。

(22) 前掲『台湾野球史』六九二頁。「同志を糾合して嫩倶楽部を組織し、自分から主将となり、忽ち南部野球界の強豪となつて…（略）…南北対抗の野球戦に於ても十、十一年（一九二一、二二）の両年に北部の雄鉄団を屠るに至つた…（略）…そこで彼は嬉しくて堪らず十一年に嫩を率ゐて内地遠征を企て…（略）…是等のため彼が消費した金額は無慮五六万円と言はれてゐる」（同前）。

(23) 前掲『立教大学野球部史』六〇頁。

(24) 「〔リーグ加入によって〕経常費は急激に増加するが、唯一の財源である入場料の収入が、どの位あるのか見当がつかない。その上当時の金額で七百円程品代の未払が、美津濃にある事が後になって解った。「美津濃が来た」と聞くと、私は学校の中を逃げ廻ったものである」（小沢綾助「赤字に苦しむ」同前、四八九頁）。

(25) 前掲「職業チームか学生チームか／誤解された立教選手」。

(26) ただし、中川小十郎（立命館長）の意向によって四〇〇円は台湾球界の寄付された（前掲『台湾野球史』六〇〇頁）。

(27) 以下、同前、五八六頁。

(28) 「六大学リーグの優勝候補／立教野球部を招聘」（『台湾日日新報』一九三三年一〇月一五日）。

(29) 以下、前掲「制服制帽でバットをぶら下げ／立教大学の選手連／晴れやかな顔をしてやつて来た」。

(30) 以下、「球界の覇者『立教』／闘志に満ちて来台」（『台湾日日新報』一九三三年一二月三一日）。

(31) 「立教選手一行／総督を訪ふ」（『台湾日日新報』一九三四年一月一日）。

(32) 「背広姿の総督と長官」（『台湾日日新報（号外）』一九三四年一月二日）。

(33) 「立教チーム神戸著」（『台湾日日新報』一九三四年一月二〇日）。

(34) 「緩球に新生面を開いた景浦投手」（『台湾日日新報』一九三五年一二月一八日）、「球速、カーブ兼備し期待される西郷投手」（『台湾日日新報』一九三五年一二月一九日）。

(35) 以下、「待望の立教野球団／元気よくきのふ来台」（『台湾日日新報』一九三五年一二月二九日）。

(36) 久保田正次編『立教大学野球部史（昭和十年度）』（立教大学野球部、一九三六年）四七頁。

(37) 太田清一郎「海外遠征記」（前掲『立教大学野球部史』一八頁）。

(38) 前掲『立教大学野球部史』三八頁。
(39) 同前、一〇四頁。
(40) 「立教野球チーム／六月渡台か」（『台湾日日新報』一九三五年三月五日）。
(41) 「立教の渡台は不可能視さる」（『台湾日日新報』一九三五年四月一六日）。
(42) 前掲『立教大学野球部史』八六頁。
(43) 藤田寛治「想い出は昨日の如く」（前掲『立教大学野球部史』四九七～四九八頁）。
(44) 「今秋の不成績から選手廿余名脱退」（『東京朝日新聞』一九三〇年一一月一九日）。
(45) 「この困った事態に直面して久保田部長も非常に心配されました。優勝の前年にも野球部にはちょっとしたトラブルがあり、先生としてはまたこんなことでという気持もあったのでしょう」（前掲『立教大学野球部史』八六頁）。
(46) 同前、八七頁。
(47) 田宮富士雄「財政改革のことなど」（同前、五〇四頁）。
(48) 前掲「「野球統制令」と学生野球の自治」八三～八四頁。
(49) 前掲「財政改革のことなど」五〇四頁。
(50) たとえば一九三六年の立大遠征に際して台湾体育協会台南支部は八九四・六一円を補助している（前掲「帝国的体育運動與殖民地的現代性」一一七頁）。遠征先として台湾が優先的に選択された理由は、浦田主将と古岩井副将がともに台北一中の出身であったためであると思われる（久保田正次「台湾遠征雑感」前掲『立教大学野球部史（昭和十年度）』四七頁）。
(51) 前掲「財政改革のことなど」五〇四頁。